

特 251

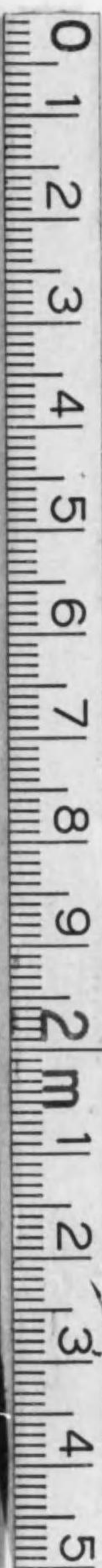
816

「獨逸國民に告ぐ」に就いて

38

4

始



特 251

816

「獨逸國民に告ぐ」に就いて

38

4

特251  
816

木村素衛先生講述



「獨逸國民に告ぐ」に就いて



松本市教育會

## 「獨逸國民に告ぐ」に就いて

### 1

「獨逸國民に告ぐ」に就いて、これから三回にわたつてお話を致します。書物は大体お讀みと思ひますが、フイヒテは其の中で、「今日我々の自由は唯言論によりてのみ認められる。そしてその言論さへもあらゆる機會に於て束縛されつゝある。かゝる時に自分があらゆる危険を冒してかう云ふ事を述べるのも祖國愛にかられるからである。」と云つてゐます。祖國に對する愛がこの講演の原動力でもあり、思想の展開にもなつてゐるのであります。だからして祖國愛とは一体何であり、如何なる所に成立し、どういふ構造を持つか、それを明らかにすることがこの講演を中心から把握する所になります。私はそれを中心として以下述べて行きたいと思ふ。フイヒテは、祖國愛に立脚して、「祖國愛が國民教育にとつて最も大切であり、祖國愛を通して人類全体の改善と、改革に進まねばならぬ。」と云つて居り、彼は一國、一國民でなく、全人類の精神文化を眼中に置いて講演をしてゐるのであります。

今云ふ如く、この講演があらゆる危険を冒してなされたと云ふ事は、當時はナポレオンの爲に

プロシヤは浸害され、壓迫され、政治的自由を失つて居る、まかりまちがへば、ファイヒテはとらへられ、殺されねばならぬ、左様ふ云ふ事情にあつたのであります。ファイヒテは「高傑な人は我々の事件よりもつと小さな事件の爲めにさへ生命を賭して反抗を試みて居る。現在の事件よりもつと大きな事件が何處にあるか。死を賭した企てに對して何人がこれを妨害する權利を有するか。」と云つてゐる。

ファイヒテは生死を賭してドイツ國民に呼びかけたのであります。當時ドイツの國情は政治的自由は奪はれてゐたが、併しそこに新しい機運の起つてゐる事を彼は見逃さなかつた。それは今までと異つて新しい發展的要求が國民の中に動いてゐる事であつて、彼はこの新しい機運を慧眼にも洞察したのであります。一体い、政治家とか教育者とかは、社會に於ける新しい機運を捕へてそれを發展させる事に依つて大なる成功をおさめるものであります。ドイツの新しい機運を彼も敏感にとらへて、そこからドイツ國民に呼びかけ、そして生命を賭して、ドイツ國民を救ふものは新しい教育であり、その教育はまた祖國愛に基づいた國民教育以外にはないと叫びかけたのであります。ところで、ドイツの衰へた外的原因はナポレオンの侵略であるけれども、ファイヒテは却つて深く獨逸民族の生活の奥に立入つて、その眞因を探し、獨逸人の利

己主義が頽廢の原因であり、それが結局獨逸を當時の如き悲運に陥れたのであると觀破したのであります。つまり道德と宗教との頽廢が獨逸の悲運の深い眞因である、だからドイツ國民は奮起してすでに陥入つてゐる道德的宗教的頽廢より立上らねばならない。そこにファイヒテの根本主張があるのであります。

其點に關して第一にファイヒテが注意してゐることは、苦痛の中に甘んじてはならないと云ふ事であります。いつたい苦痛は人間の熟慮と決心と實行とを刺戟する爲に存在するのである、とファイヒテは考へてゐる。山中鹿之助が「うきことのは此の上に積れかし限りある身の力試さん」と歌つてゐますが、苦痛に對してファイヒテも飽く迄積極的態度に出でゐる。苦痛に對して我々は甘んじてはならない。これを媒介にして却つて新しい決心をなし、且つこれを實行すべきである。高い理想主義の立場から、苦痛の存在を人間は肯定し、より高い實行への促進力としてこれを受取つて行かねばならない。

第二には、現代の狀勢に對して明瞭な認識を持たねばならぬ、といふこと。今苦痛にあるとしても、自分を甘やかし慰めるやうな考方に安んぜず、大膽に男らしく苦痛を認識してこれを要素に分析し、不幸に對するこのやうな正しい認識により不幸の根源を見きはめ、ここからし

て新しく計劃して幸福の世界に出て行かねばならぬ。自分で軽々しく不幸を慰めずに、正しく率直に深くこれを認識せねばならぬ。

これに聯關して國民の歴史教育が大事である事もフイヒテは注意してゐますが、その際にも彼は、在りのまゝを見、在りのまゝを云ひ、在りのまゝを聞かなければならない。我々の恐怖を起させるものは我々の不明であり、猜疑である。現實を積極的に認識しなければならぬ。それを當局が恐れるならばそれは卑怯である。我々は運命をごまかさないので、歴史的事實を眞實に認識し、そこから正しい實行へ出なければならぬと云つてゐる。

第三に、我々を助けるものは我々の力であつて、他の何物でもあり得ない。ではどうしたらよいか。——我々自身の力で獨逸民族は立ちなほるべきで、他にたよつてはならない。

更に進んでそれでは第一、第二、第三、の目的に達する手段は何か。現實を見ると、國民は政治的自由を壓迫されてゐるからフランスに對して積極的に敵對できない。ただ一つ教育の方面のみは見逃されてゐる。我々はこの一角を、即ち教育を獨逸國民勃興の手段として取上げねばならぬ。教育の仕事が残された唯一のものである。フイヒテはこゝに唯一の希望を認め、彼れ自身この爲めに生きながらへることを望み、子孫の爲めに生きようと云ふ決意を示してゐま

す。自分の爲めに生きるのではない。他人が我々の爲めに制度を立て、他人が我々の爲めに軍隊や立法や司法をしてゐる時代である。それを取返さねばならぬ。こんな事から我々の子孫を自由にしてやらねばならぬ。この目的の爲めに、彼は二つの目標を提出して来る。

第一の目標は、國民の道徳的性格を作ることである。今までは教育は、人間に何かあるものを作り與へたのであるが、新しい教育は何ものかを人間に作り與へるのではなく、人間そのものを作るのでなければならぬ。

第二の目標は、全体を對象としての國民教育を成立させねばならぬ。従來は少數のものに限定して少數の學者教育を目的とした。ところが社會を作るのは一般國民である。然るにその一般國民の教育は捨てられてあつた。國家の基礎は國民全体であるのに、それは今までは盲目的で自然のなりゆきに任せられてあつた。そこでフイヒテは、學者(教養階級)と一般民衆との間の對立を破壊し、國民全体をして利己心を去つて國民的道義に目覺めしめなければならぬ。教育者は兒童をなるべく早く學校を出し教育を終らせて衣食につかしめると云ふやうな浅い考へをたゞきつぷして、眞の國民道徳に目覺めた精神的人格を作り上げる事を任務としなければならぬ。人間を作るとは單に訓戒を與へて善に對して自覺させるのではなくして、善を自ら行

はねば居られぬ様な道徳的人格を作ることではなければならぬ。善に對して理解するのみではない。必然的に善の實行に向かふ様な實行力のある人間を作り上げねばならぬ。これが新教育の目標である。利己的でなく善そのもの、ために善をする、道徳の爲めに道徳を愛するといふことをしなければならぬ。そしてかゝる善が現實界の原型となるのでなければ現實界は正しくなつては行かない。教育は善に向つての道徳的な性格を作ることと目的としなければならぬのである。かくの如く善の爲めに善を爲すと云ふところに我々の創造的生命の快感が成立して来る。我々が、官能的快感を得ることを目的とすれば、利益を得るといふこと、成功するといふことが教育に結び付きそれが教育の目的となつて來ざるを得ない。利益には希望と恐怖とが伴ふ。そこではこれが教育の手づるとなる。新しい教育はこれに反し創造的快感を手蔓とするのでなくてはならない。人間生命が創造的に人間世界を發展させるには、かくの如き創造的生命の快感、善の爲めに善を爲す事に伴ふ快感が手づるとなるのでなければならぬ。自己の創造的生命の發展に對する盡きることなき愛に自覺せしめ、そしてそこに進ましめるのである。ところが創造にはそれを貫く掟がある。そこで精神的創造の爲めには此の掟を知らねばならぬ。こゝからして初めて自主的創造的活動へ出て行けるのである。かくの如く創造的生活の

掟、即ちその法則を認識することが、新教育に必要であるところからして哲學と教育とが今や結びついて來なければならなくなる。教育は哲學的基礎に立つて成立し、哲學は教育によりて實現されるのである。教育と哲學とは持ちつ持たれつの關係に立つものと云ふ事が出来る。

ところでかゝる創造的生命は三つの方向に分けて考へられる。第一は知的方面、(認識的方面) 第二は道徳的方面、第三は宗教的方面。

一、知的認識的方面。今までの教育は記憶に訴へ賞罰を手段として行はれてゐた。そしてさういふ知識の注入は將來の成功の利益を目あてとして行はれた。此處では本當の生命は死に、創造はなくなる。新しい教育はこれに反し認識そのもの、爲めに認識を愛し、眞理そのもの、爲めに眞理を愛する。これが知識教育の眞の目的である。眞の知的愛には凡そ利益とか名譽とかは關するところではない。人間生活の創造に對する純粹の愛、従つて創造の法則に對する純粹の愛を旨ざめしめる事のみが知的教育の目的である。一体眞實の知識は外から注入されるものではなく、内面から眞理そのものの自己發展として起つて來るものである。そこで上の如く眞理の爲めに眞理を求める立場は、(一)確實で内面から把握される知識を與へるばかりでなく、(二)創造的に眞理そのもの、成立が体験されるから知識がその内面的成立に於て捕へられる。

れに依つて又自我が高尙にされる。(單なる利己主義的な學問的態度から高められるから。)

かくの如く眞理愛からすれば、教育は自己の利益や成功の爲めの教育ではないのであるから上述の如く自我がおのづから高められて来る。眞理の愛そのものからして教育が行はれるのであつて、もともと官能的な動機に依るのでないから、かゝる方針に依る教育は自然に又道德的人格の自覺への準備となつて来る。官能的な利己主義から離れて道德的人格の成立が準備されるのである。この様に見てくると、教育は受身な立場に於て成立するのではなく、内面から燃える意志の覺醒が教育の主眼となつて來てゐる事が明かである。眞理への意志の鍛鍊が教育の目的であつて、利益の爲めに眞理を興へる事が目的であるのではない。かゝる純粹な意志を鍛鍊せねばならぬ。そこでこの立場から生徒が指導される時には、教育が終つて生徒が孤獨な状態に置かれても、尙不斷に眞理を追究して行くやうにならざるを得ない。これが最も大切な事である。學校教育が終ればも早や研究が止まるやうではいけない。學校を出ると本を讀まなくなる様ではいけない。一定の知識を興へる教育でなく、眞理そのものの追究を愛してやまぬ様な性格に迄教育するのが、それが新教育である。學校を出て孤獨になつても尙眞理を愛して止まぬのでなくてはならぬ。フイヒテが、知的教育の根本的な重要性をどこに認めるかはかくして

明らかになつたと云へやう。

二、しかし今云つた立場で行くと、すぐれた純粹な科學的な研究者として人間を作ることが出來ても、それは直ちにすぐれた道德的人格を作る事にはならない。一に於て法則や理性に對する愛を知ると、こゝからして併し新しく、理性愛で結ばれる社會的結合を自ら要求する様になり、其團體に於ては生徒は自ら利己心と勝手氣儘な利益のために行動する事をつゝしむ様になり、全体の爲めの責任を果すことに努めるといふやうになる。進んで積極的に身體を動かして團體の爲めにつくすべきであるといふ自覺を持つやうになる。以上二つで、眞理の爲めに眞理を追及し、又理性的に結合した團體に於て團體の爲めに身を以て實行して行くといふやうになる。かうした二つの愛がフイヒテによつて提唱された。第一は眞理の爲の愛、第二は國民の全體的社會の爲の愛。この二つで現實的世界に對する教育は出來たと言つてよい。しかしこれだけで本當に生徒の内面性が教育され得たか。第一は認識力の養成であつた。そしてそれは同時に第二の道德的自覺への準備を成すことが出來た。第二は道義の自覺であつた。これだけでは未だ完全な人格の教育が出來上つたとは云へない。

三、新しい教育の最後のものは宗教教育である。自己の根柢に神を知る。自己は神とつなが



り、神の直接の表はれである。一切の現實的生活は神なくしては幻に過ぎない。現實世界はそれ自身では最高の世界ではないが、併し永遠の世界も現實を離れて彼岸に在るのではない。現實の世界はその深き根柢に神を有し、神の現れであり、これが眞に現實の世界の深い意味である。單に現實世界の爲めだけなら道德的自覺にて充分である。この意味から言へば、宗教教育は實用的でなく、無用の用と云ふ事も出来る。併し人間の完全なる理解、人生の最高の疑問の解決は宗教に依らなくては出来ない。宗教はかくの如き問題に對する認識を與へるものである。この解決に依て人間は一切の外界的なものから解脱する事ができるのである。それ故宗教は他の何の目的の爲めにでもなく、宗教の爲めの宗教教育が行はれなくてはならないのである。フイヒテは收穫の望はなくとも汗を流して種子を蒔き、恩義を知らぬものにも幸福を與へ、罵る者にも助力を與へ、數百回の失敗の後にも信仰と愛とを動かさないと云ふ様な事は單なる道德性から出るものではなく、絶對者に對する宗教的なる心の底から湧く愛に依つて出て來るものであると云つてゐる。神的な愛からかゝる生活態度と云ふものは初めて起るものである。我々の人生には、種々なる困難が横はつてゐる。かゝる困難に逢つても尙そこから立上つて來るためには、生命の原動力として宗教が必要になつて來るのである。先の二つのもの、即

ち第一の知識的愛も、第二の道德的愛も共にまだ眞に永遠に徹した生活を開くものとは云へない。此の立場では、人生の完成と云ふものはなく、どこまで行つても人生は唯無限に進んで行くものであり、永遠の旅人の状態にあらねばならない。人生が完結体としての意味を有する爲めには、これらの立場とは別に宗教的立場が必要となるのであるとフイヒテは考へてゐるのである。

此の三つが人間の精神の創造的發展のそれぞれの方向としてそこにそれぞれの教育が成立つる。前二者は永遠なものを無窮に追ふものであるのに對し、宗教はかゝる生活に完結性を與へるものとして獨特な意義を有するのである。ところで彼の時代は破滅と墮落とを越えて新しい創造的時代の先端に立つものであると彼は考へた。利益や成功を望みとした爲めにナポレオンにやられ、墮落と破滅とに陥つたのである。それ故に人生を眞に正しい創造的發展に導かねばならぬ。今の時代は地上に於ける二つの時代の中間に立つ。そこに新しい機運が見える。それをフイヒテは洞察した。しかもフイヒテは他の國民の先驅者となり、準備者として立直つて行くのを獨逸國民に要求することは至當なことであると自信したのである。して見れば今述べた三つの教育の方向も結局獨逸國民の教育と云ふ事へ結集して來る事にならなければならない。人

類生活全体の高まりの爲めには獨逸國民が特殊な重大な任を有する事になつて来る。——それでは一体國民とは何であるか。問題は新しくこゝへ移つて來なくてはならない。

## 2

國民とは何であるか。これが新しい問題である。この問題についてフイヒテは非常に深い考へを提出して居る。其れは國民の本質及び其の成立の深い根據を示すと同時に、祖國愛の深い基礎づけを示してゐるのである。之に關して三つの重要な思想を取り出せると思ふ。

第一に、國民は神的生命の特殊化である事。第二は、神的生命は本來表現的生命として理解されて居り、自己實現的な生命であると把握されてゐる事。特にフイヒテは、國民の持つてゐる言葉、言語といふものに於てその神的生命が表現的に活動せしめられる事を強く主張してゐる。従つてフイヒテの講演は、言語哲學から見ても意味が深い。第三は、國家といふものは、國民生活を維持發表せしむる手段として存在するものである事。

此の三つの點が國民を考へるに就いてフイヒテが示した重要なものである。而して祖國愛とはかゝる神的生命(絶對生命)の表現者としての國民に對する個人の愛に他ならないのである。

第一、神的生命の特殊化としての國民。國民或は民族といふものは今日の哲學では區別して

ある。(民族Volk, 國民Nation)。今日國民とは國を自覺的に結成してゐるものであり、民族は單に自然的なものであると區別されてゐる。此の區別は近頃の事であるがフイヒテはかゝる區別に立たないで、兩者を一つに取り扱つてゐる。そこで彼に依ると民族なり國民なりは、社會を形作る全体である。そしてそれは神的なものの發展の或る特殊的な法則の下に立つてゐる。簡單に言へば今云つた發展の法則が一國民の國民的性格(國民精神)を形作る事になる。國民精神とは根源的神的生命の發展する特殊法則を示すものだと思へられてゐるのである。國民とは、だから神的存在の特殊的な現はれであつて、神的发展の一つの自己限定であると思つていい。かういふ風に國民の成立基礎が深い絶對的生命に繋がつて居るところからして、國民の永遠の存續に向つて、正しい人達は自分の生命の永遠の望を繋ぐ事ができるのである。自己の生命の短さをこの永遠の生命への結合に依り打ち克ち、有限な生命をかくして無限へと繋ぐ理がこゝにある。國民とは本來かういふ風に絶對的神的生命の特殊化であるから、従つて又混淆性のない純粹な民族が神の本質の永遠の秩序を表すものであると考へられる。我々は有限の生命をかゝるものとしての國民的生命に繋ぐことにより永遠の生命にあづかる事が出来る。此の確信が先づ個人を國民に繋ぎ、更に國民を媒介として個人を全人類へ深く結び付けるのである。

個人——→國民——→人類  
(種) (類)

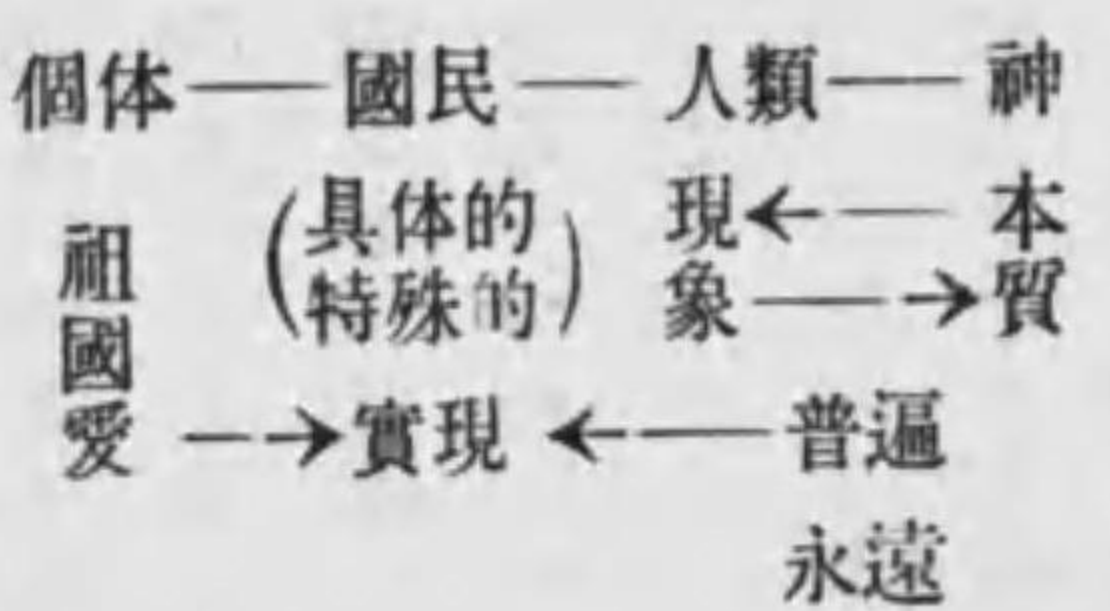
言ひ換へれば個人が種に結び付き更に類に結び付くのである。そして祖國愛とは此の國民的生命の爲に努力する愛であるが、第一には自己に屬する民族を信頼し、喜び、愛し、其の民族の一分子として自分の存在する事を光榮と思ふ。そこからして従つて又同一民族としての子孫に對する愛が生まれて來なければならぬ。これが第一で、第二に祖國愛は活動的で、自己の民族の爲めに犠牲的になる犠牲的の愛として生まれて來る。國民を救ふ爲には死をも辭するべきではない。單なる個人に死んで、却つて吾々は國民の中に永遠に生きるのである。此の點からファイヒテはキリスト教の一つの態度に對して反抗を示してゐる。キリスト教がしばしば現世に關する種々の事件、例へば國民や國家を頭に置かず、現實から隱遁する所に眞の宗教があるのであるといふ傾向を示すのを誤りであると強く指摘してゐる。我々はもともと國民として生まれ、國民として育ち、其處に住み、其處に死する。國民は、神的な絶對的生命の特殊的自己限定である。絶對的生命は人間本質へと自己を特殊化して初めて表はれることが出来るものである。様々な個体に分れる事に依て顯現せられるのである。國民として、民族として、初めて神的な

普遍的な生命が具体的に表れるのであつて、絶對的なものはかくの如く特殊化的に現はれる他に現はれ方は無いとファイヒテは考へる。さうすると、一つの國民がその國民性を本質としてその本性によつて動き、本性のまゝに動く、其處に神的絶對的永遠が現はれる事になる。一言で云ふと、普遍的なものは、それは特殊化した特殊な相に於ての他には存在しない。國民はさういふ一つの特種相である。

ところがさういふ國民はさうして動くかといふと、唯自からの力に依つて自覺的に動いて行く。人間的な事件は人間自身が何等他のものに依らず自分の力に依りて發展させ開拓して行く。そこで上述の事とこの事とを考へ合せると、國民の活動は絶對的な神的生命の自覺的自己形成であると考へられなければならない。更に進んで、他の國民を自國民と同様に尊重せねばならぬといふことも亦必然的に起つて來る。他の國民も絶對的特殊的生命の自覺的自己限定であるとするれば、當然其の存在も尊重せねばならぬからである。その點に關しては、獨逸國民は昔から他國民を深く尊重する國民で、時には自己の存在に壓迫を加へて迄も他國民の正しさを認めた。それ程獨逸國民は他國民を尊重する國民である。

大体この様な風にファイヒテは國民と云ふものを見てゐるのであつて、そこから國民教育の意

義が明かとなつて来る。即ちかくの如き國民の祖國愛が最も大切な事であつて、この祖國愛が結び紐となつて全人類と國民とを結び、これに依て全人類の精神的文化の改善を期するところに國民教育の眞の意義があるのである。自國民だけの事を考へるのはエゴイストである。祖國愛をもつて全人類に結びつくのでなければならぬ。これは見逃す事の出来ない深い愛の思想と云はなくてはならない。人類發展の善き愛の爲めの獨逸民族愛といふ事がフイヒテの考へである。背景の深いものであつたことを誤解してはならぬ。



まとめて言へば、神の本質そのものの現はれとして人類が成立する。現象は本質をはなれてはない。この普遍に對して國民はその具體的な特殊化としての實現である。そして國民とはかく普遍的なものの具體的實現であるから、國民に對するものとしての祖國愛は元來具體的特殊的なるものとしては有限であるが、それが上の如く普遍の特殊的限定であると云ふところからして祖國愛を通じて國民の生命は永遠に結びつくのである。普遍はかゝる現はれ方より外に現はれ様はない。

祖國愛の意義をこのやうに深く考へて來れば、先きの一、知的愛二、道德的愛三、宗教愛

の三者もおのづから祖國愛の中に具體的に統一されて來る事になる。こゝに國民教育の原理が成立するのであつて、國民教育は祖國愛に依りて、深く基礎付けられて來るのである。祖國愛は併し上述の如く本來普遍者、絶對者の特殊的實現としての國民に對する愛に他ならないのであつて、従つて自己の國民のみならず他の國民をお互ひに尊重すると云ふ意味を含んだものでなくてはならないからして、其處に全人類の愛が當然成立して來なくてはならなくなる。こゝからしてフイヒテは國民と國民との間の間柄的關係即ち國際性(インターナチオナリテート)を重視すべき事を明にしてゐる。

フイヒテが國民を如何に理解したかは大体上述で明になると思ふ。所がこの「獨逸國民に告ぐ」の中に哲學的に非常に重要な原理が出てゐる。それは國民の本質についての深い考へであつて、これに依つて同時に又國民教育の深い基礎づけが、明らかとなるのである。

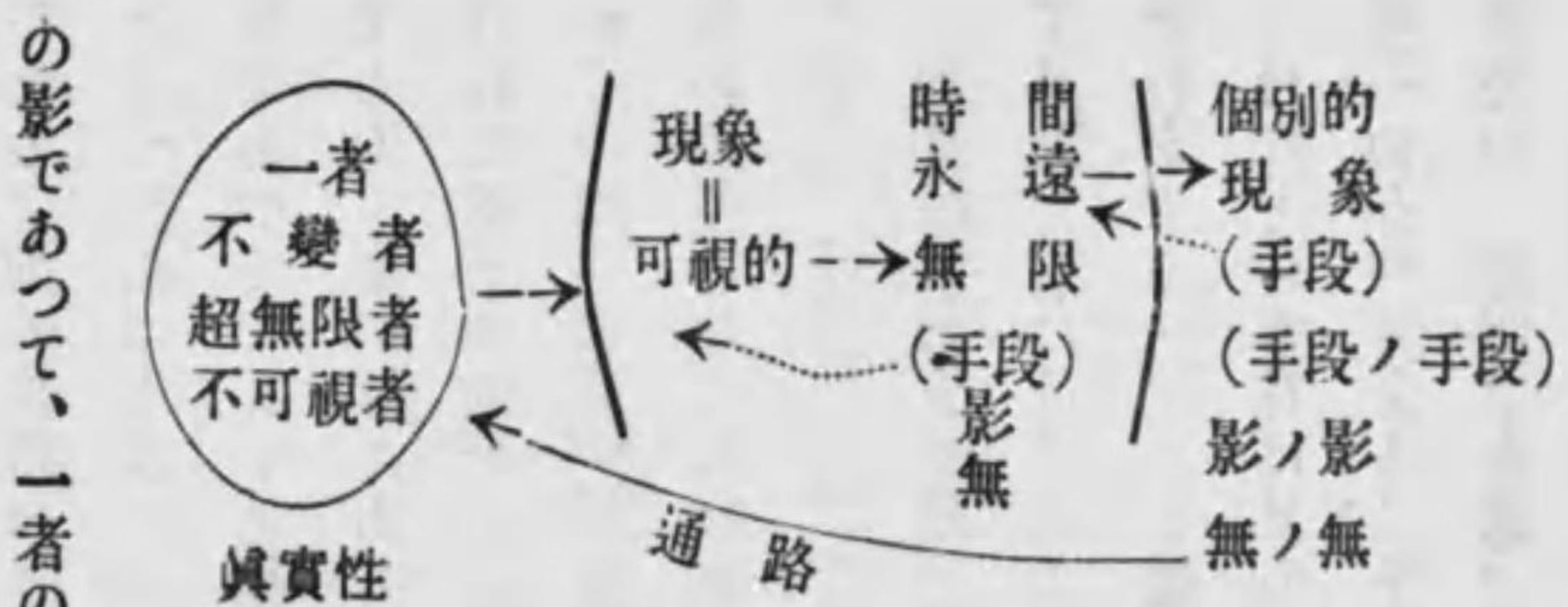
## 3

フイヒテの哲學は一八〇〇年を以て後期に入ると見られる。一七九九年迄が初期で、同年ベルリンへいつてから思想的に轉換が現はれてゐると考へられる。それは「獨逸國民に告ぐ」にも出てゐる。その場所は第七講の終、一二〇頁に一ヶ所(自由に關して)、一二三頁以下の部分

で一ヶ所、それから第三講の中の第三項と第四項(岩波文庫)。此處には初期の哲學的立場をのみ込んでしまふ様な深い立場的轉換、發展があり、深まりが認められる。

これから述べる事は彼の哲學思想の根本的なもので、それはフイヒテ哲學の中心を掴み、祖國愛の湧き出づるもとを、捕へる事の出来る様な部分である。フイヒテは其處ではこの事を獨逸哲學の一般の特性だと言つて居る様に、彼はこゝに獨逸的精神そのもの、本質を見たのである。そこでは彼は、獨逸哲學は無限よりもつとより以上の普遍的なものにまでその原理を高く求めて行つてゐる事を明にする。超無限的な普遍者にまで上つて、この超無限者に於て眞の實在が見出されるのである。

時間、永遠性、無限といふ様なものが、この超無限の一者、唯一の存在の一者の現はれとして成立して来る事がこの後期では明にされるのである。一者とはそれでは何であるか。それは見得ない、絶對的に見得ない不可視的なもので、これを見得べからざるものとして捕へる事が本當に捕へる所以であつて、それは自己を現象に現はす事に依つて初めて見得るものとなるのである。一者即ち不可視者が表はれて現象となる。現象となるとはそれが、可視的となる事、見得るものとなるといふ事であつて、この可視的となると云ふことに於て時間(永遠、無限)



の影であつて、一者の現はれる型(圖式)に過ぎないのである。此の様な思想が後期には展開し

が、成立つのである。だからフイヒテの言ふ眞の實在とは、永遠を越えたものである。しかもそれが、かくの如く現象に現れて來なければならぬとすると、それは永遠性を越えた自己表現者であると考へねばならない。所が精しいことは後で述べるが、初期の哲學原理は永遠とか無限とかが窮極的原理として根本的なものであつた。無限を包み永遠を包むいかなる意味に於ても對象化することの出来ないものが眞の實在的なものになると云ふ考へは初期にはなかつた。後期に於ては祖國愛とか國民とかもかゝる原理から基礎づけようとしてゐるのである。フイヒテがこゝで述べてゐるところに依ると、既に無限といふものが、獨逸哲學からいふとそれ自身無である。此の無限は決して眞の實在ではない。そこを越えて行つたところに唯一の眞の實在がある。無限性(時間性)は、一者が(絶對に見えざるもの)見得るものとなる手段に過ぎない。本質に於ては無限は一者の

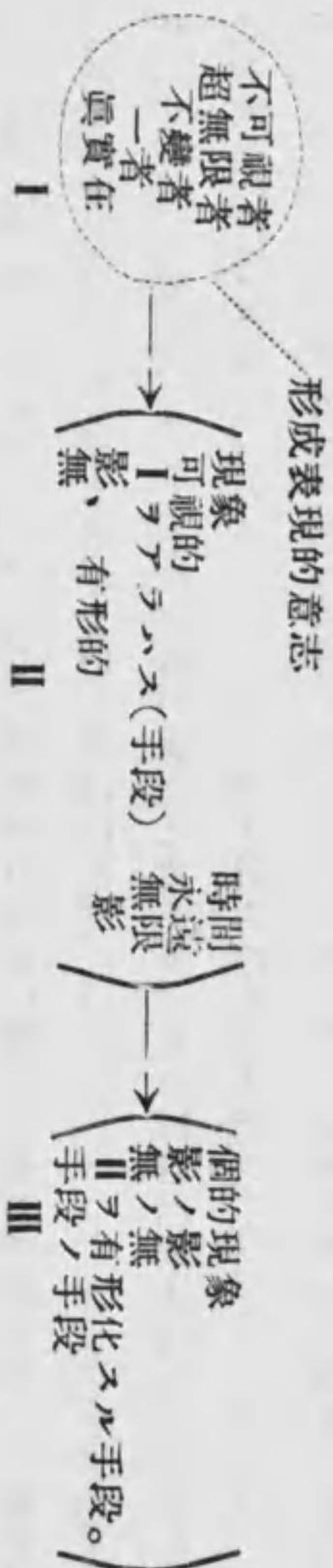
てゐる。即ち見得べきものは見えざるものの影であるといふ思想である。此處に見得べきものと云つたのは現象の世界で、我々がそこに生きてゐるこの社會である。これは見えないものの影であつて、もつと細かにいふと、個々の現實的現象は、無限の更に影であり、従つて無の無であり、影の影であると云ふ事になる。個々の現實的現象は、先に言つた時間とか無限とか言はれた第一の無が、現實に見られる手段に過ぎない。個別的現象として我々が見てゐる事柄が、かくの如く永遠が可視的となる手段であるとすれば、又個別的現象は一者の現はれる爲めの手段の手段とならなければならない。

昨日終りの方では、國民及祖國愛の本質を知るのには本當の實在は何であるかに就いて考へて見た。之には、フイヒテが初期の考へよりもつと深い違つた考を持つてゐたことを話した。それをもう一度思ひ起して、今日の話を續けて行きたいと思ふ。

ほんとの實在は見ることの出来ないものであつて無限を超越して、そして變じない。それは唯一の存在である。それが自らをあらはす。可視的になる。可視的になるための手段が、時間、永遠、無限である。それはどこまでも、眞の實在が可視的になるための手段に

過ぎない。だから、之は眞實在からいへば、影、無に過ぎない。

ところが、現實、我々の出會ふ世界は、時間の中に、様々の現象として成立してゐる。眞の實在がかく可視的になるといふことは、有形的なものになる事に他ならない。形の無いものが、形のあるものになる手段として、時間、永遠、無限を通して、種々な個別な世界が起るのである。個別的現象は併し更に、永遠の影なる故、それは永遠の影の影、無の無でなければならぬ。それは更にこの永遠や無を有形化する手段に他ならない。その意味からいへば、個々の現象は手段の手段といふてもよい。さういふ聯關にある事を、昨日申し上げた。



形あるものは、形無きものの影であるといふ事になる。形有るものは、即ちアイデアは、形を越えたもの、影に他ならないのである。フイヒテは初期に於てはかくアイデアを越えたものをイ

デアの根柢に考へてゐる。

かういふ風にして彼は語つてゐる。

かゝる考へを如何に理解したらよいか、そこに困難がある様に感ぜられるであらう。これを理解する爲にスピノザと比較して見る事がよいと思はれる。

スピノザは唯一の神を實體としてこれを眞の實在と考へる。それは自己原因として存在し他の何ものにも依存しない。一切のものはそこから引き出されて来る。

スピノザに於ては、この實體が、その本質を形作るものとして、屬性を持つてゐる。それは二つあつて、一つは思惟(心、意識)であり、も一つは延長(物質)である。そして心の世界と物の世界との多種多様な存様はこの屬性様相である。

神=實體  
自己原因  
..... 屬性..... 様相  
{ 思惟(心)..... 心の様々(個々の心的現象)  
 延長(物質)..... 物の様々(個々の物的現象)

スピノザのこの体系はファイヒテの上の体系的思想に相應じてゐる考がよく解る。

實際にファイヒテはスピノザの影響を深く受けてゐる。スピノザ的の考のあることは否定出来

ない。併し同時に非常な違がある。

スピノザの形而上學が世界を幾何學的な靜的な關係の下に明かにしたに對しファイヒテの立場では、實在は自己自らを形成的に表現して行く生命である。動的な生命である。然もこの動的な生命は、本來、自覺的表現者である。そこがスピノザの哲學と異なる點である。ファイヒテのは表現的生命的實在と考へてゐるのである。

此の事は、特に第七章の終りの言葉をもつと續けて讀んで行くと明かになる。

眞の實在は本來、見る可からざるものであり、かゝる實在が、見ゆるところの現象の世界の根柢にある。現象の世界はかくの如く見ることの出来ないもの、現れであるとすれば、ほんとの實在は如何なる意味に於ても見る事が出来ないか、といふ問が起る。これに對して、ファイヒテから引き出され得る答は次の如くである。

無限といふ唯一の可能的形象の中へ、今や見る可からざる眞實在が、見ると云ふ事の自由に於て根源的なる生命として、云ひかへれば、理性的の決意として、直接に表はれて来る。そして其の外には表はれ方はないのである。このやうにファイヒテは云つてゐる。

ファイヒテは上述の如く、こゝで見ると云ふ事と決意とを一所にしてゐる。その點をよく考へ

て見なければならぬ。見るは只、観想的に即ち單に理論的に見るのでなく、決意を通して見るのである。即ち實踐的に見るのである。これは行爲的に見る事、形成的に見る事に他ならぬ。

現象の世界の只中へ、眞の實在が決意を通して表はれて來ると云ふ事は、それ故この眞の實在の本質が形成的表現的な意志であることを意味してゐるものに他ならないのである。

かくの如く實在は表現的形成的な意志であり、實踐的に働くところにその本性を有つと云ふ事に於て單なる理想的立場に立つスピノザとフイヒテとの根本的な相違があるのである。

そこでさういふ風に、意志が現象の世界の底を破つて、現象の世界に表はれて來ると、そこで現象は、意志の世界に對して、それを取りまく自然の世界として成立する事になる。

言ひ換へれば、意志とそれを取りまく、自然との對立が表はれる。フイヒテがこゝに云ふ無限と云ふ事を考へて見ても、無限とは元來限定の否定である。無限と云ふ事がいはれるのは、何か進んで行くものがあつて、それが切られ、切られたものがかく切れ乍ら、而もその切斷を超えて突き進んで行くところに、そこに無限が成立するのである。

進んで行くものが切られると云ふ事は、そこに我れに對立する我れならぬものに出喰はすと云ふ事である。それが自然(非我)である。その自然が、我々を邪魔し、妨害する事があるにも

拘らず、破つて進むところに意志が成立する。理想と云ふのは、かゝる意志の自己限定として成り立つものに他ならない。例へば耕作に於て、與へられた土を、鍬で軟らかくして、自然を改造し、穀物を實らせる様に、自然から我々の意志が阻まれてゐるのを、突き破つて行くことが、理想の實現である。

この事をフイヒテは次の如くに云つてゐる。

凡て精神的なものとして現はれてゐない個定的存在は、見ると云ふ事から外へ投げ出された眞の實在の影に過ぎない。見る事はこれを媒介にして却つて眞の實在を見る事が出来るのである。—— 大体かう云ふ意味の事を云つてゐる。意志は表現的に世界を形成して行く。影に形成されたものを媒介として未だ現はれざる一層深い實在を見て行くのである。自然はかゝる際の意志を阻むものなのであつて従つて意志のない立場に立つならば、自然の實在性と云ふものは出てこないのである。

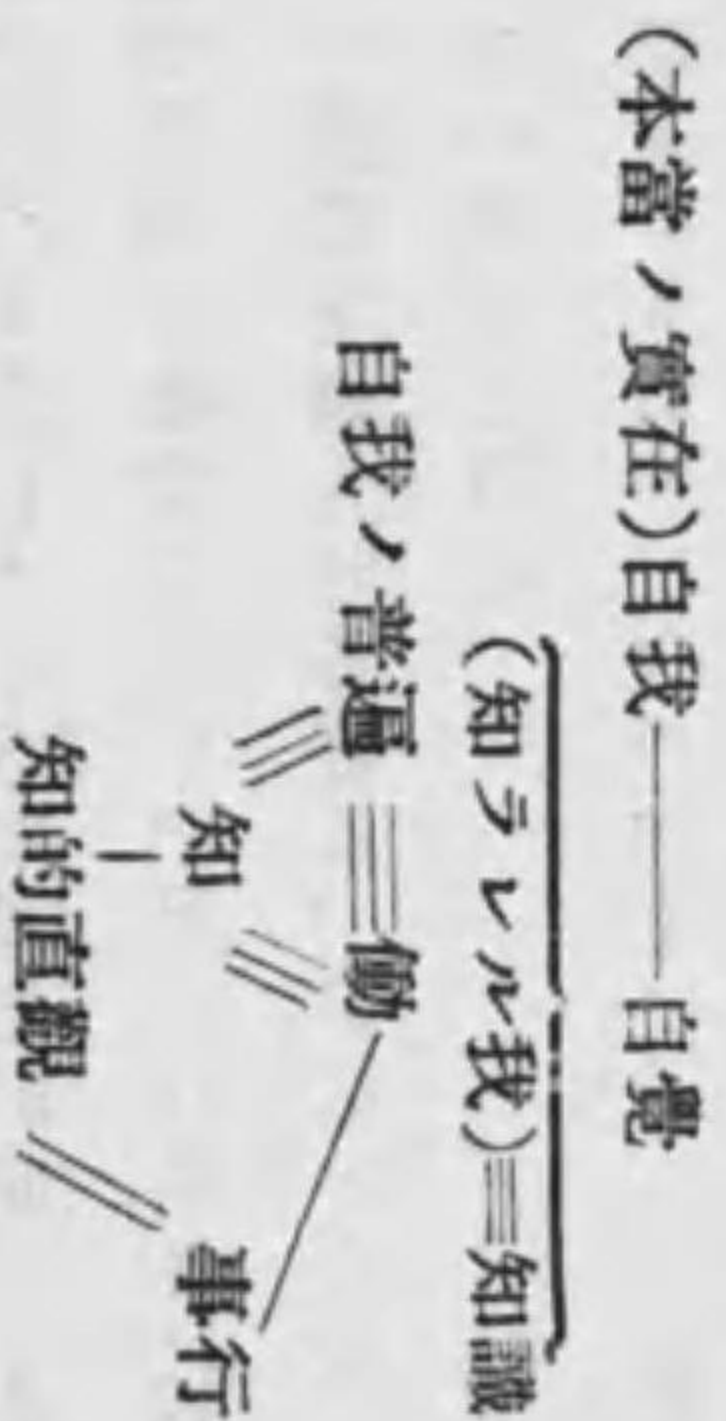
かういふ聯關に於て意志と自然とが結びついてゐるとすれば、意志が自然に突き當つて邪魔され乍ら、それを突き破つて形成的に進んで行くところに意志の本性があるので、従つて意志(實在)は本來形成的努力として現はれる。その他に意志の現はれ方はない。かゝる考へ方が初



期の考へ方である。之れを今少し詳細に紹介して行き度いと思ふ。それに依つて後期との區別がはつきりして来る。

4

初期の哲學の代表となるものは、「全知識學の基礎」(二七四—九五)(邦譯あり、岩波)である。本當の實在をフイヒテは自覺的意志と考へた。それが自我の本質である。自我の本質は併し自覺性にある。自覺の本性は、我が我を知るといふ働きに在る。知られる我と、知る我と一つになる。それが自覺である。自我が在ると云ふ事はかゝる知る働きとして在ると云ふ事に他ならぬ。かくの如く働く事を除いては在ると云ふ事はない。だから在る、と働くと、知るとの三つの事が一所になつたものが自覺で、之をフイヒテは事行とか知的直觀とかいつてゐる。



所が我が我であると云ふ事は、我が自己を絶對的に立てると云ふ事で、それが自覺の本性である。右の如きものとしての自己の絶對定立、これを第一根本命題として早出してゐる。

自我は自己を端的に定立する。これを「全知識學」では第一根本命題として居る。

ところが我は自然に出會ふ。自然は我れならぬものとして我を否定する。かゝる事が起つてゐるのは、自我の内に自己否定性が在る事を意味するのでなくてはならぬ。即ち自我は非我を立てる事が出来るのである。自我は自個に對して非我を定立する。——これが第二根本命題になる。

ところが上の二つの命題は明かに矛盾する。併し一つを捨て、一つを取る事は許されない。共に妥當するのではなくてはならぬ。この事はこの矛盾を綜合する事に依つての外は成立せしめる事が出来ない。之がフイヒテの第三根本命題となるものである。

- 1. 自己ノ絶對定立+
- 2. 非我ノ定立(自我ノ非定)-
- 3. 綜合 1 制限



即ち自我は自己の中に自我と非我とを部分的に對立せしめる。二者は、自我の中に制限し合ひ

つゝ對立するのである。

さうするとお互が云はゞ一つの垣を境として、成立する事になる。若しこの時兩者が境界を守る事が出来るならばそこに平和があり、調和があるが、併しそれは許されない。どこ迄も自我は絶對的自己定立であるから、非我を追ひのけやうとする。非我は追ひのけられまいとする。それ故境界は靜的限界でなく動的な限界であるより他なくなる。

自我は全体を自分のものにしやうとし、非我も又押されて来るのに對して押し返して、自我を絶對的に否定しようとする。さうすれば限界は動的であつて押しつゝ、押されつするところにこの限界がある事になる。

かく綜合は靜止的でなく、動的綜合でなければならぬ。この事の意味は、この綜合が出来上つた綜合でなく、どこ迄も出来つゝある綜合であると云ふ事ではなければならない。

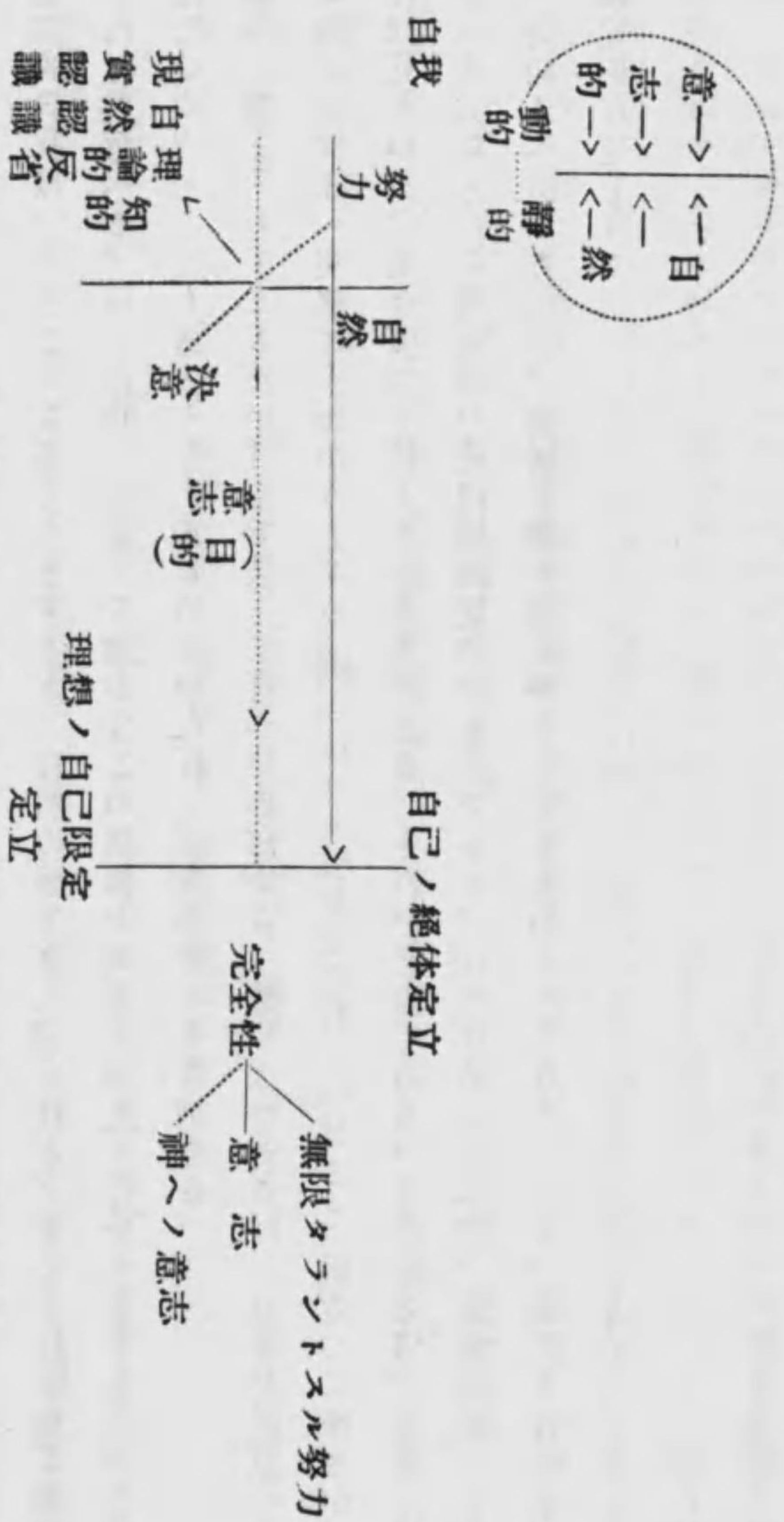
言ひ換へると、綜合への無限の戦がそこにあるのである。ヘーゲルの綜合とは違つて、フィヒテの綜合はかくの如く戦としての綜合である。力と力の結びつきの綜合である。戦つて他を破り盡さねば息まない力と力との綜合である。さうすれば自我は努力的存在とならざるを得ない。常に自分を屈服して行くものに對抗しこれを克服して理想を實現して行く。それがフィヒ

テの自我の本質である。

さてかゝる限界に於て兩方が押し合つてゐるとすれば、どういふ事が起るか。

意志的自我は、何處までも進まうとすると、自然の面で立ち切られる。併しこれに依て却つてそれは跳返へる。併し同時に跳返へる點からこの限界を尙乗り越えて行かうとする力がなければならぬ。どこ迄も進まうとするものが切られ、ば當然かゝる事が起る。

無限に進まうとするものが、力で進んで行つたのだから、物にぶつかる時には當然跳返へると同時に尙向ふへ突抜けて行かうとする。例へばゴム毬を壁に打ちつけると、跳返つて来るが、目には見えぬが、突き破つて行くといふ力がある。それが意志である。その歸る方が自然に限定される方向として理論的、或は知的反省の世界である。自然認識(具体的、現實認識)である。尙向ふへ出る方向は、現實を乗り越えやうとするものとして意志であり、理想や目的を自己限定的に定立する。



さて、意志と自然とはかゝる聯關を成してゐるから、最高の意志はあらゆる障害を克服して人間性を完全に實現しようとする。かゝる意志は神への意志、完全性への意志に他ならない。人間は此の意味に於て、神への意志、絶對なる神への努力を持つたものとなる。不完全なものとは全く限定されてゐるものである。完全なものは限定を越えたもの、即ち無限でなくてはならぬ。人間は神への意志を持つ。之は人間は無限たらんと努力すると云ふ事と同意義である。初期の哲學の窮極の原理はかくの如くにして無限である。

5

然るに無限は、上述の如く後期に於ては影であつて、その背後には超無限がある。初期と後期とは如何に聯關するか。

フィヒテの初期のこの立場は、傳統的にはプラトンのエロスの考へに脈をひいてゐると云ふ事が出来る。「饗宴」はエロスの本質について、語つてゐるが、エロスは不完全なものが完全性を思慕し追求する愛である。だからプラトンはエロス愛と云ふ言葉を用ひるが、その本質に於てはエロスは意志である。不完全性を脱脚して行かうとする意志の立場である。この無限の意志の目ざす理想的目標が「獨逸國民に告ぐ」に於ては上の如く影と呼ばれてゐるのである。

眞實在は更にかゝる影(イデア)を越えたものである。それは何か。それをフイヒテは「獨逸國民に告ぐ」の第三章、第四章に於て愛といふ言葉で表はしてゐる。意志といふ言葉では呼んでゐない。初期には愛といふ言葉は出ない。こゝに前期より後期への著しい展開がある。愛は不變な超無限的な一者である。それから却て無限、時間、永遠が出て来るのである。完全な眞在はみづから現はれんが爲めにはみづからを志向する他なく、かくしてそれは未來的なものとしてあらはれるより外なく、時間がこゝに成立するのである。完全な眞在は無限に未來的なものとして永遠なる價值として意志の行手に見られて來なければならぬ。之がフイヒテの初期に於ける無限に進んで行く意志の立場である。だから後期の立場は初期の無限性の立場を包み越えてゐると云ふ事ができる。即ちフイヒテの後期の立場は、愛と意志との對立としてではなく、全体を愛が包んでゐる。この立場から人生の窮極の問題を論じたのが、後期の「淨福なる生活への指教」(岩波文庫)である。

そこでは、個性的なものが、完全に、そのまゝ、絶對の愛に依つて救はれるといふことが、明らかになされてゐる。之は初期の立場では絶對に云ひ得ない事である。初期には無限な努力のみが人間に課せられて來る他ない。何故かといふと、何處迄進んでも、完全性に行かないからである。

ある。この方向は切りがない。この無限は現實には到達出來ないイデアである。初期の哲學はそれ故永遠の戦ひであると云つていい。何處迄行つてもここでは不完全を免れず言ひ換へれば、廣い意味に於ける惡とか罪とかを脱しない。それをどうして脱脚することができるか。

之はどうしても、意志の立場ではできない。意志の立場では、不完全な立場を、刹那刹那突き破つて進まなくてはならない。現在は未來へのステップに過ぎない。現在は常に超越されなければならぬ。然るに救ひが成立するためには現在から未來へ進むのでなく現在が直ちに永遠であるのでなければならぬ。現在が未來への足場でなく、言ひ換へれば今が永遠の現在でなければならぬ。それには意志を更に超える原理がなくてはならぬ。其れが哲學的にいへば、絶對の愛である。其れが宗教的に言へば神となるのである。(大乘佛教などで言ふ慈悲である。)

生活の最も根柢をなすものが、絶對の愛でなければならぬ。ここへ後期の思想は發展して行つたのである。神なくしては、愛なくしては生きられない。意志の審判を包み越えた所に眞の實在がある。人生の最深の根柢は愛である。(このフイヒテの晩年の思想は、ヨハネ傳の思想に影響されてゐる。)

後期の見ることの出来ないものとしての眞實在、——(目的、理想、イデアを超えたもの)——は絶對的な愛である。併しこの愛はフイヒテに在つては表現的なもの、自己を形成的に表現する原理であつた。かゝる意味に於て、フイヒテの愛は、エロスを内面に含んだ愛でなければならぬ。何故なら自己を表現する爲には自己が自己の目標とならなければならず、エロスとはかくの如く自己の目標となつた自己に他ならないからである。かゝるエロスを超えた愛そのものはそれ故絶對的な愛として不完全なものを直ちに超えてこれを肯定し救ひ取るものである。なくてはならない。かゝる愛を吾々はアガベと呼んでゐる。キリストが「我は罪人のために來れり。」と云ひ、親鸞が「善人尙もて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」と云つた事などは絶對的な愛を表現してゐるのである。然しフイヒテの愛は、エロスを含んだアガベである。傳統的なキリスト教ではエロスとアガベが對立しキリスト教的愛はエロスでなくアガベである。かく、ギリシヤ精神とキリスト教精神とは反撥してゐる。フイヒテは、ギリシヤ的精神を含んだキリスト教的精神であるといつてもよい。フイヒテの愛はエロスを内面に止揚するアガベの立場と云へる。スピノザの愛は、神の知的愛、自己認識の愛である。スピノザ哲學の愛と云つても、かく單に認識の立場に立つてゐる。

フイヒテの愛は然るに實行的表現的愛で、文化建設の絶對的な愛であると云へる。その内面に意志の理想主義的立場を止揚してゐるのである。エロスを持ち、之に止まらないで、更にアガベに包まれ乍ら然も、理想の爲めに努力して行く立場がフイヒテの愛である。アガベとエロスを結んだ愛で、不完全即完全の辨證的综合を持つたのが、フイヒテの晩年の立場である。キリスト教的アガベとギリシヤ的エロスが総合的になつてゐる。自然を媒介として、表現的な絶對愛に到達せんとするのが、フイヒテの愛の立場である。さういふ、立場が、第七章の終りから表はれて居り、第三章第四章にも書かれてゐる。

さて愛は反省的認識(現實認識)を媒介として、始めて見らる可き世界へ現はれて來る。反省といふ言葉は、反射から來てゐる。光りの反射である。力が突當つて返つて來るものである。それが自己自身の中に反省となり、突當る點を超えて意志の世界(理想の世界)が出て來る。表現的イデーの自覺である。意志が、自覺となる爲めには自らが自らを折返して行かねばならぬ。自己の障害面を對稱として、それを超える方向に自覺的な自己建設が成立するのである。その反省の媒介が自然である。絶對的な自己實現としてかくの如き形成が起るのである。兒童の精神生活に結びつけて考へると、この突當つたその直接状態が感情として表はれる。

何か完全に感ぜられるものがその向ふにある。之が内面に起つた時、光が向ふに見える。ファイヒテは、其れを、憧れの感情といつてゐる。此處から先へは行かれないと云ふ突き當りを超えて先きを感じる事が憧れの感情となり、即ち其れが自己自身をはつきり擱んで、理想認識の形となる。

理想を直覺する時、そこに現はれる愛がある。その愛は本來、理想を追求して行く直覺的愛である。そこに強い文化を愛する無限の愛がある。神の生命を身に受けて、何處迄も實踐して行く熱情が、そこに起る。これを明かな認識に迄仕上げ、育て上げて行く、それが、新しい教育の着眼點である。神の愛に懃ひ乍ら、理想をどこ迄も實現せんと努力する人間を作るところ、そこに新教育の使命があり、新教育の根本があるのである。

絶對的、神的生命は、それ自身として現はれるものでなく、必ず個別化して現はれる。一つには個人、二つには團體として民族、國民に現はれる。其處に民族的意志、國民精神がある。國民の意志は神的生命の特殊な愛のあらはれで従つて國民を愛し、祖國を愛することは絶對的愛を愛する事を意味する。祖國愛とはかくの如く絶對的愛の具体的な在り方に他ならないが、故に、祖國愛に死ぬとは、絶對的愛に死すること、死して却つて永遠に生きる事に他ならな

い。祖國愛に生きる事はかくの如くにして、生命の本質的意味に自覺することである。單に一つの民族、祖國の愛に生きるのみでなく、本當の絶對愛に生くることを意味する。其處に本當の祖國愛の深い意味がある。祖國愛をファイヒテが語る深い根柢は此處にある。形無きもの、見る可からざるものが、自らの姿を見んとして具体的に現はれるのが、祖國愛である。祖國を愛する生命の教育は、従つて絶對の生命の愛に於ける教育でなければならぬ。かくして、それ故又、國民の教育が、絶對の生命の教育といふことにならなければならぬ。

## 6

昨日は國民或は民族に就て三つの大きな觀點、即ち

- 一、民族は神的生命の表れである。
- 二、言語と民族との關係。
- 三、國家と民族との關係。

以上の三項からファイヒテを理解する事を始めました。

これより第二の點、民族(國民)と言語との關係に就て話を進めて参ります。ファイヒテは獨逸の國民教育の基礎として、國民の本質をとらへようとすることに當つて、言語に着

眼して参ります。

表現的愛としての神の生命は本来自己を外に出して見る、あらはして見るところに成立する。其處に絶對的生命の本質があるならば、國民といふものは絶對的生命の實現であるから、もと／＼精神生活の表現である言葉によつて、逆に國民の本質を探つて行く事ができるのは當然の道でなくてはならない。

フイヒテはドイツ人と他のゲルマン民族との重要な相違の點を、ドイツ民族が特に住地を昔から變へなかつたと云ふ事と、同じ言葉を維持發展させて行つたといふ此の二つに認めやうとして居る。—— その場合フイヒテは住地の重要さは餘り重く見ないが、併し今日の風土學的な見方からはこの點は實は極めて重要な事として注意を向けなければならぬ事である。言葉を彼は特に重要視し言葉に於て獨逸民族と他のゲルマン民族とが全く違つたものであると云ふ事の對立を認める。

ドイツ民族は、一つの根源的な言葉を持つてゐるのに對して、其他のゲルマン民族は、外國の言葉を取入れて、それを變化しながら自分のものとして行つた。言葉と國民との結びつきに於て獨逸民族と他のゲルマン民族との相違があると云ふ事が非常に重視されてゐる。

一体言葉とは人間的存在の自己表現的な形式として、一つの必然的な成立をなすものである。元來から言へば、人間が言葉を語るのではなくして、人間に於て人間の本性が言葉に表れてくるのである。それで言葉はさう云ふものであるから、一定の人間の性質を表現してゐるものを民族と云ふならば、民族の本性を言葉の上から規定する事が出来る。一つの言葉を語る團體が即ち一つの民族である。

一定の人間的特性を表現するやうなものを、それを民族と云ふならば、民族がその認識を言葉で語るのではなく、その民族の持つ認識（或は人生と云つてもよい）が民族を通して言葉に表はれて来る。さういふやうに考へて行かなくてはならない。民族の根柢に動いてゐる民族的精神の直接の表現が言葉である。言葉の意味をかゝる深さに於てフイヒテは見て行く。言葉と云ふものは一つの民族にとつてさういふやうに内面的、本質的に必然的な性質を持つてゐるにも拘らず、元のゲルマン民族が分裂した時に、今日のドイツ國民は徹頭徹尾自分の本質から出るやうな生きた言葉を話し續けて行つた。然るに他のゲルマン民族は自分の本質から根源的に出るやうな言葉を語らずして、外國の言葉を語り、本質から言へば死んだ言葉を語つてゐる。言葉の上から考へて他のゲルマン民族とドイツ民族との間にこの様な對立がある。

それで言葉といふものは、民族の生命の底から来る。個人の生命を衝いて言葉の表現が出て来る。言葉に於て民族生命は自己の表現を表はして来る。意志も感情も自己の生命を衝いて生れる。深い関係が民族と言葉とにある。民族の生き生きとした言葉を話すものと、他から輸入した死んだ言葉を話すものと、本質的にどんなに違つて来るかと云ふ事は明白である。哲學から考へて見ても生き生きとした言葉を話す民族の生み出す哲學は、民族の生命の底から生れた自覺の聲として出て来る。他の外國の言葉を使ふ人が生み出す哲學は、自分の心の底から出る哲學ではない。所でドイツ民族の様に生きた言葉を持つ民族に於ては、精神の底から色々の概念が流れ出る。思想の方では、哲學となり、文藝に於ては、美しい詩が表はれる。民族生活の要求が哲學にも、文藝にも、藝術にも、現れるのである。さうして生きた言葉である哲學や文藝に於て自國民の全生命を表現し把握する。ところが一旦生命の底から生きた言葉を通じて出る自己の本質が、客觀的に表現されたものが、逆に作る原の生命へ働きかける。さうしてこの民族の精神生活を活動的ならしめ、民族をして生き生きと勤勉に嚴肅に努力的ならしめる。さういふ性質を生きた言葉は持つてゐる。自分の本當の本質から出た自分の姿をかゝる民族はその言葉に據つて知る事が出来るから、生き生きとした國民的生活が現はれる。

之に反して死んだ言葉(外國の言葉)を自國の言葉としてゐる民族では、學問も思想も文藝もその民族の生活に對しては、表面的に浮かんであるに過ぎない。其處では單に時間を快く過ごさうといふ享樂的の意味を持つた態度が生れ、力強い文化を創成する事は出来ない。文藝も思想も享樂的である。

ドイツ民族は一つの純粹な民族として、根源的な言葉を昔から持つてゐる。その性格は、新しい坑道を掘り下げて、日光を深い底まで導き、其處に思想といふ岩石を切出し、未來の人をしてその岩石により住宅を建設せしめなくては止まない。深く坑道を掘るといふ建設的な哲學の仕方をしてゐる事はドイツがフランスやイギリス等と異なる所である。

さて民族と言葉と民族文化との間に、前に言つたやうな關係が成立するとすれば、我々は此處から國語の教育が民族に取つて極めて重大なる意味を持つて來ることが理解出來なければならぬ。注意すべきはドイツが當時の國歩艱難なる時代に立つて強く自國の精神文化を高めて行かなければならないこの時、自國の言葉に對して深い力點を置いてゐる事である。

フイヒテは自國民の文化を極力強調してゐるが、何れの文化にも國際性はある。他の民族と交渉しながら、自國の文化を高める事についても、積極的に考察して行かなくてはならない。



フイヒテは併しそれには觸れてゐない。自國の言葉を失つて外國の言葉を模倣する國民は獨立を失つて行く。この問題は日本に移しても重大なる問題である。

此處で今日の言語學 Philologie について概略的に述べ加へておき度い。單に言葉の意味を解釋する事に今日の Philologie は止まらないで、進んで言語哲學 Sprachphilosophie と結びついて發達してゐる。ディルタイ (Dilthey) は此の點をはつきりさせてゐる功績のある人である。

生命は我々に體驗として動く。この體驗は表現 (expression) へ出て行く。ex はギリシヤ語から來てゐて、外へと云ふ意味を有し Press はおし出す、自己より外へ自己をおし出す、主觀を客觀化して見る事を意味する。生命は客觀化して見て初めてはつきりわかる。例へば私は私の顔を自分で見る事は出来ない、鏡に映して始めてわかる。藝術家は形成的に表現してみて自己の力を始めて知る事が出来る。即ち畫家は描き、彫刻家は彫り、歌人は歌を詠んでみて始めて自分がわかるのである。自分にどれだけの力があるかと云ふ事は出して見なければわからない。自己を客觀化してみなければ解らないのである。この時客觀化されたものこそは、實は自覺された本當の自分と云ふ事が出来る。ヘーゲルの言葉を借りて言へば自分に即してゐる自分は即自 (an sich) であり自分を外に投げ出して見る時に對自 (für sich) となる。彫刻家が大理石

と云ふ自分でない自然界に投出して、自分でない自分を知る事が出来る。それは自分が自分に對するものとなつた事で、この對自性に於て自覺が成立するのである。言葉は自分でない空氣の振動であつて、物理的の運動であるが、これに自分の精神生活を托して外に投げ出し、自分でない自分の外へ精神 (内) が出て行く。表現はかくの如く自分でないものに出るのであるから、定を媒介とし、従つて内と外との間には一旦連續が切れる、即ち溝があると云へる。表現はこの溝を乗り越へて初めて可能である。その意味で表現は非連續の連續として我々の前に立つてゐる。それが表現の世界である。自分を投げ出して見なければ生命はわからない。自分が自分で無いものに出ていつて初めて自分が自分に見える様になるのである。

表現は本來社會性を持つてゐる。私の言葉は私の口から出て諸君の耳に入り、私の耳にも入る。自分が自分に見える様になると同時に其の瞬間に他にも見える様になる。表現的な存在であると云ふ事は、人間は本質的には社會的な存在であると云ふ事を意味する事に他ならない。然るに表現は又價值に關係し價值あるものを表現する。表現はこの時未來に關係する。時間に關係して來る。前に表現が社會的であると云つたが、これに對し今は又表現は歴史的でもある。

原の体験は純粹には内であるから、表現されなくとも、自分で味はへば内的生命に關する限り分るが他人には分らない。体験は元來かくの如く内に在るものであるが、嚴密に云へば、如何なる体験も顔色や身振等身体の何れかに現はれて來る。併し普通には言葉によつて最も廣範圍且つ的確に表現されて來る。そこでさういふ表現から動く原の生命体験をどうしたら理解出来るかと云ふに、これは表現を媒介として逆に理解的に内に入つて行く事より外に途はない。即ち表現の理解によつて体験が知られる。之はデイルタイの理論である。さうするとデイルタイのやうに精神現象を理解するには、体験—表現—理解といふ聯關が非常に重要な意味を持つて來る。表現的生命即ち精神科學の對稱となるものはかういふ方法で初めて理解出来る。表現には種々あるが最も人間に行き渡り最も廣い範圍を占めてゐるものは言葉である。だから言葉を理解する事は、原の体験を理解することである。言葉が体験の表現であるならば、その國民の言葉の中にその國民精神が表現に出てゐるのでなくてはならない。ギリシヤ民族や中世の民族と今日直接交渉することは出来ないが上の如き方法で言葉の研究から接して行く事が出来るのである。このやうに言葉を通じて民族の体験の理解に入つて行かうとする、これが新しい言語哲學である。言語哲學に立脚して今日の新しい言語學は動いてゐるのである。解釋學と

云ふのは原の体験が表現に表はれる、その表現を媒介として原の体験に探り込んで行く行き方である。この立場から人間の本質を捉へて行くのは、例へばハイデツカーが左様である。これは今日の哲學の重要な一潮流として現れてゐる。

國語教育に關しては尙考へるべき事が多い。封建時代ならいざ知らず、今日では西洋の言葉が入つて來て我々の言葉となつてゐるものが、澤山ある。例へばポンプ、ランプ、ラヂオ等はさうである。かういふ外國との盛な交渉に就ては産業革命以後の機械文化の發達を深く考察してみる必要がある。昔人間の神経が地球の裏にひそんでゐたとすると、交通通信機關の發達してゐる今日では、それが恰もマスクメロンの條紋のやうに、地球の表面にむき出しに出てゐるのである。世界の何處かに於て例へばロンドンに起つた一事件は、殆ど直ちに日本の我々に知れて來る事ができる世の中になつてゐる。これが昔であつたならどの位の時間がかゝつたかわからない。

このやうに通信機關の發達によつて、各國國民生活の交渉が緊密になつてゐる今日に於ては、昔の世界を念頭に置いてゐては、國語の教育は解決出来ない。十九世紀以後機械文明の發達によつて餘程變つて來てゐる。ファイヒテのいふ根本的見解は國語に對して本質的に力強い眞

理を綱んでゐるが、今日はもつと世界史的な具体性に於て國語の問題を考へなくてはならぬ。

## 7

國家の事に關しては此處では主として國家とは何か、祖國愛が國家を支配する事、自由の問題、ドイツの純粹なる國家政策等を引括めて話して行く。

一人人間は永遠に繋るものを愛する。何等かの意志を持つと云ふ事は價值のあるものに生命が關係すると云ふ事である。價值のあるものとは社會に於て人間性一般の認めるものである。絶對的生命の特殊的に限定されたものは我々の本當に愛するもので、永遠に繋がるものである。一体自己が永遠に繋がる、自己の永遠性を認める事の出来ない人は愛を持つ事ができない。所が人間は自己といふもの、根據を深く求めて、そこに深い愛の原理に自己の存在を基礎づけて行くものである。併し目に見えない世界をのみ愛する人は、個人を超えて直ぐ天國に繋がるが、地上に祖國を持たない。かういふ宗教は抽象的な宗教で排すべきものである。自己の心の中に於て天と地、眼に見得べからざるものと見得るものとの二つのものが互に滲透して行くやうな人、さういふ人には本當に具体的な天國と云ふものがある。この天國は地上にある天國で

あり、天と地と結び附いた天國である。眞に祖國を愛する人はこれを些の減損なく子孫に傳へんが爲にはその血液の最後の一滴までも流して止まないであらう。

民族は恰も天と地との繋りである。見えざるものが見得るやうになつた特殊限定である。地上に於ける永遠性を據ふものは實に民族である。この民族は普通の意味で云ふ國家を超えてゐる。普通の國家とは何か。國家とはフイヒテの理解では、社會的秩序を整へて行く手段として樹てられ、國內の平和を望み、各人が勤勉に日常生活を維持し、天命を完ふすることを任とするものである。すべてこれ等は實は祖國愛が本質的に要求するものを實現して行く手段に過ぎない。永遠の生命即ち神の生命をこの社會に實現する手段方法として、國家の秩序が平和に保たれなければならない。これが普通の意味での國家の使命になつて来る。

そこで國家は、祖國愛からして當然制限されて來なくてはならない。これに二つの點がある。第一に普通の國家は其の目的とする國內の平和又社會の平和を維持する手段として成る可く個人の持つてゐる自然的自由を制限して行く。かく自由を制限すればする程危険はなく、素直な國家となる。所が今云つた様に普通の意味の國家が秩序を保つと云ふ上から個人の自由を制限すれば、無事泰平であるに違ひないが併し祖國愛が欲して居る創造的生命、創造的文化の

發展は、個人の自由を媒介としなければ決して生々と興つて来るものではない。此處に祖國愛と國家との對立が起つて来る。國民の文化が興る爲には、國家組織は避けられぬが、これのみに汲々として個人の自由を壓迫することなく、假令政治は多少弱められても個人の自由を認めなければならぬ。出来るだけ個人を自由にすることがなければ、國家の眞の發達は有り得ない。従つて國家は祖國愛から制限を受けることになる。第二に祖國愛は元來國家に向つて國內の平和財産の維持、生命の幸福を保つ等の國家の普通の目的以上の目的を、國家に向つて與へる。こゝに祖國愛の本質がある。祖國愛は政治的な國家統制機關としての國家に對して、本當の意味の精神文化的の國家を考へるのである。技術的な國家以上の生命を國家に與へる。國家が兵力を備へるのも、國家がその祖國愛に基づくより高い目的の爲に備へるのである。時あつて普通の意味での國家の生命秩序財産が、犠牲にされなければならぬことが起り、祖國愛の要求する目的が立てられるや否やは全く不明な様な急迫の場合に至ることがある。それは歴史の世界によく起ることである。このやうな非常の時に始めて絶對權力を持つた政治の主權が現はれて来る。その時高く正しい目的の爲には、低き平常の目的を犠牲にするといふことになる。兵力はかゝる時の爲に備へられなくてはならぬ。日常の平安な生活には本來の神的生命から現れる

永遠的の意味を持つた絶對的の決意は現れて來ない。非常時に決意を持つて進まざるべからざる政治は、平安な際には必要ではない。唯民族の非常の危機に際して、始めて國民の決意が必要となるのである。この時生命の奥底から動いてくる決意が必要になつて来る。かゝる時の政治が本來の意味での政治である。この時斷乎として犠牲を命ずることの出来るものは、平和の時の市民的愛ではなくして、絶對に永遠的な生命の容器になつてゐる一層高い祖國愛（絶對的生命の特殊限定）の焰である。この時に自覺ある人々は人類の使命を擔つて、自己自ら一切を捨て生命を培つてやつて行く。

フイヒテは神的生命の特殊的具体的實現として、國民精神と云ふものがあると云つてゐるが、これが本來的政治の根源である。平時はこれが消極的な意味しか持たない。國家が單に國內平和を維持する手段であるのは普通の國家である。國家の根本的原動力が、危機に際會する時は、國民精神を本にした本當の意味での政治が起つてくる。此處に國民的決意が現はれ、この時祖國愛が火のやうに燃えてくる。この祖國愛が、愛するところの民族精神が、人間文化の眞の根底に外ならない。其處に永遠の生命の實現がある。自由はかゝる民族的創造的生命、普遍的な民族的歴史的生命の實現に缺くことの出来ないものである。普通の平和の爲に自由を壓迫

するやうでは、眞の國民精神の發達はない。

フイヒテノ考へによれば、國家と云ふものは、普通の平安なる生活の政治のみに關して云へば決して第一次的なものではない。それは單に一つの民族の中に現れる純粹に人間的なるもの、發展と云ふ高い目的を實現する手段に過ぎない。一つの民族の中に現はれる純粹に人間的なるもの、實現は國民文化、即ち人類文化の具体的特殊化と考へられ、従つて人類文化を忘れる時は、國家的利己主義になつて了ふ。之に依つて樹てられた國家は、一旦は榮えるが、やがて清算されて行かなくてはならない。個人に於ける個人主義は許されずして、國家の個人主義が許されることはあり得ない。他國の文化を尊重し、よき國際關係の中に人類の文化を發展せしめる正しい道を、力強く進んで行かなければならない。國民生活に現れる眞に人間的のものは、人類文化の中に實現されて行く。ドイツの純粹な國家政策が、この基礎の上に明らかに現れて來てゐる。

國家を組織するものは全く自由藝術的なものである。これはルネッサンス時代に現れた特色ある考へ方であつて、ブルツクハルトの「伊太利に於ける文藝復興の文化」などにも鮮に書かれてある所であるが、フイヒテに依ればドイツ人はこの思想を外國より學んで、外國人以上にやり遂げたのである。

誰でも各自の幸福を要求すると云ふことを前提として、そこに國家統制の原動力があるとする様な政策をとつてはならない。社會を一つの齒車のやうな全体として考へ、そこに國家統制の技術を考へる。この考へは齒車の動く原動力はどこから出るかと云ふに、それは解らないのである。ドイツ人の國家政策はこれに反して、精神を國家政策の原動力に置く。ドイツの政策と雖も堅固と確實とを欲し、又盲目的自然的衝動を脱却せんことを望んでゐるが、この點は外國と全く一致してゐる。唯外國と異なる所は、ドイツの政策は堅固なる確かなる事物を第一の要素とし、精神を第二の要素として、確實ならしめんとする外國と異なり、始めより堅固なる確かなる精神をして第一のしかも唯一の要素たらしめんと欲するのである。社會は精神から秩序づけて行くのでなければならぬ。精神を國家組織の根柢に置き、此の上に技術を置くやうな政策に立つて行かなくてはならない。

かゝる精神をどうして振ひ起すことが出来るか。これは未だ墮落してゐない青年層に呼びかけて、その教育に期待するより道はない。そしてその教育を特殊の階級に任せず、國民全体に任せなければならぬ。青年教育を國民一般に及ぼすことによつて良い政策を實現することが

出来るのである。この新しいドイツの政策は古いギリシヤの政策と一致するものである。

ドイツ新教育の欲する所は、偏狭な鎖國的なる精神を避け、國民教育を通じて人類文化の改造と發展といふ高い所に目標を置いてゐる。かういふやうに考へて行くとフイヒテの云ふことは一言に彼をして語らしむれば「ドイツ人となれ。」と云ふ一語で盡きる。

我々は、我々の性格を作らねばならない。ドイツ人となることは、ドイツ民族的な精神的性格を得ることであるから、この二者は同じことである。

かゝる覺悟のもとに立つた獨逸人は、世界の將來の人類の幸福は、自己一人の上に懸つてゐると云ふ責任感を持ち、意志を持たねばならぬ。これにより他に眞の獨逸人の行くべき道はない。

この講演の最後に彼は云つてゐる。「諸君にして、この本質を抱きながら、空しく亡びるならば、人類全体がその再興の望を失つて同じく亡びるのである。」と。

フイヒテは深い期待をドイツの青年層に持つてゐたのである。(終り)

附記 本書は昭和十三年七月二日、三日兩日に亙つて、木村素衛先生が當教育會の爲に御

講演下さつたものを、筆記したものであります。先生の御校閲を経ましたが文に對する責任の一切は筆記者の負ふ處であります。

昭和十四年三月十七日印刷

昭和十四年三月二十日發行

(非賣品)

長野縣松本市西町四五〇番地

信濃教育會松本部會

編輯兼 代表者 小山保雄

發行者 松本市萩町六四〇番地

印刷者 佐野豊太郎

發行所 松本市教育會

389  
471



終

